

暗哭館殺人事件

殺人事件が起きた。

現場は山の上にひっそりとたたずむ大きな屋敷・暗哭館。

犠牲者は今夜の晩餐会に招待されていた招待客の中の二人だ。

二人は晩餐会のさなか、毒入りのワインを飲んで死亡した。

外は猛吹雪。

スマホの電波はつながらず、ほかに連絡手段もない。

駐車場にある四台の車は、何者かによりすべて破壊されていた。

晩餐会の参加者たちは、この暗哭館に閉じ込められてしまったのだ。

この惨劇を計画した犯人は、いったい誰なのか。

参加者は互いに面識はなく、それぞれワケありな人物ばかり。

そしてなぜか、暗哭館の主人は姿を見せないまま……あやしい！

「これは巧妙に仕組まれた犯罪です。ひいばあさんの名にかけて、ぼくがあばく！」

名探偵・明知小次郎が立ちあがる。

彼はさつそく、招待客をホールへと呼んだ。

「さて……山中さん」

「は、はい」

「おや、山中さん、どうしました。顔色が悪いですよ」

「そんなことは……ないですよ」

山中の声は震えていた。

「表情もこわばっていますし、とても汗をかいてらっしゃるようですが」

「……そ、そうですか？ ちょっと暑いからかな」

「山中さん、ズバリ聞きます」

「……はい」

「あなたは誰が犯人だと思いますか？」

「……犯人はぼくじゃない」

「ほお」

「これで、もうわかりますよね……」

彼の言葉を聞いて、探偵はほほえんだ。

○ 『暗哭館殺人事件』にかくされた意味

「犯人はぼくじゃない。これで、もうわかりますよね……」

山中のこの言葉には、どういう意味がふくまれているのでしょうか。

晩餐会の参加者は、互いに面識はありません。

そして、駐車場には車が四台だけ。

この時点で、暗哭館にいた人数はそれほど多くなかったことがわかります。

山の上にある暗哭館まで徒歩でやって来られるわけがありません。

それぞれが一人で車に乗ってやって来たと考えると、晩餐会に参加していたのは、たつ

たの四人。

そのうち二人が殺害され、この館に残っていたのは山中ともう一人。

名探偵と名乗る人物です。

山中が「犯人はぼくじゃない」というのなら、彼はもう犯人が誰か、わかっているはず。

それでは汗もかきまですし、顔色も悪くなるでしょう。